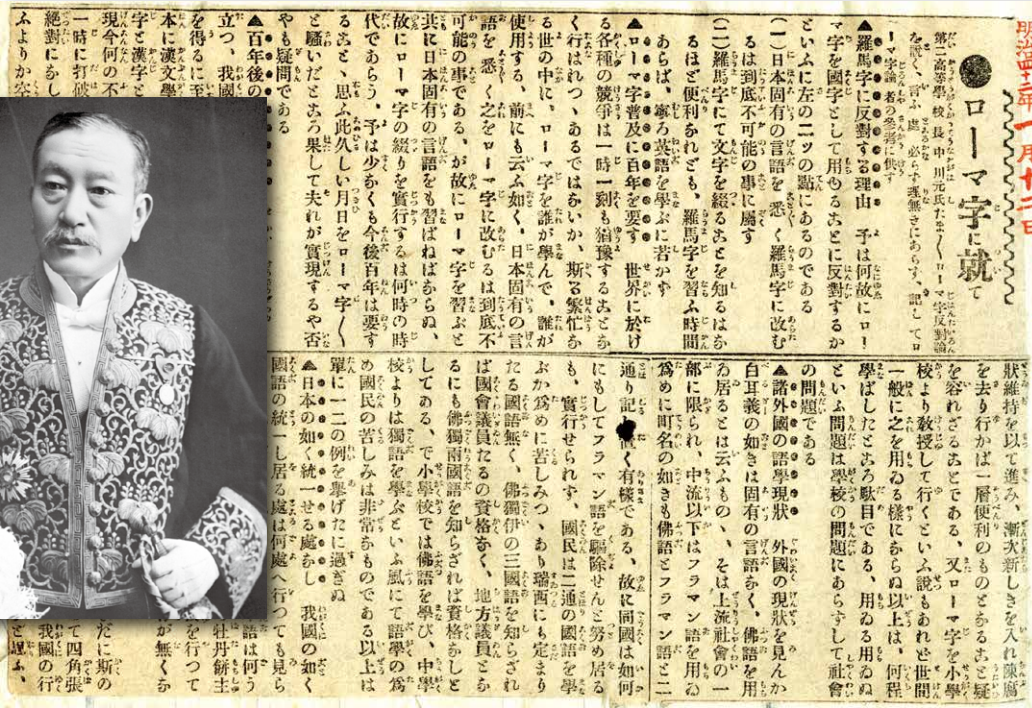


TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER

Index

- 2 旧制二高出身の
二人の北京大学総長
中国社会科学院
哲学研究所 研究員 龔 穎
- 6 日中二国間学术交流セミナー
「日中留学生研究の現状と課題」
について
永田英明
- 7 史料館のうごき
- 8 在外同胞救出仙台学生同盟
-新収資料から-

写真：左から中川元肖像、
ローマ字論争切抜帳
(中川元文書)



仙台におけるローマ字論争

第二高等学校歴代校長のうち、最長の11年間（明治33-44年）在任したのが、第4代の中川元（なかがわ はじめ 1851-1913）でした。彼の任期中に、二高から仙台医専が分立し、二高の校歌「天は東北」（作詞：土井晚翠、作曲：楠美恩三郎）が制定されました。「雄大剛健」の校風が確立した「この中川時代が二高の最も充実した全盛時代」ともいわれます（『天は東北山高く』1966年）。

古武士のような風格で、剣道や釣りから詩吟、琵琶、和歌など多趣味を誇った中川でしたが、仙台在任中に一つの論争を行っています。維新以降、日本語の主たる表記を（漢字でなく）ローマ字にするべきという「ローマ字論」が唱えられ、田中館愛橘など著名な物理学者が主張し、寺田寅彦や石川啄木も影響をうけていました。中川は河北新報紙上で、これらに反対する意見を説き、山本有成（仙台で外科医院を開業、ローマ字ひろめ会仙台支部）との間で論争を行っています（明治42年）。中川は結局、自分の論は実際の問題を扱い、山本氏の論は理論にわたり、平行線になるとして筆を置きました。なお、関連する遺稿が『中川元先生記念録』（1918年）に収録されています。

昨今、国際化のため語学教育が注目されていますが、外国語を意識せざるを得ないのもこの国の宿命でしょうか。また、当時二高に留学していた陳大斉が（次頁以下龔論考参照）、この論争を見聞し感じるものがあつたか、興味が持たれるところです。

旧制二高出身の二人の北京大学総長

中国社会科学院 哲学研究所 研究員 龔 穎¹



仙台で学んだ中国からの留学生としては魯迅（1881～1936）が最も有名であるが、その他にも中国からの留学生が多くいた。それらの留学生たちも帰国後、様々な領域で活躍している。20世紀の前半において中国の北京大学総長（または代理）を務めていた胡仁源（1883～1942）、陳大斉（1887～1983）両氏もそのような仙台の地で学んだ留学生であって、彼らはいわゆる「旧制二高」の出身者であった。

1. 胡仁源の場合

日本側の資料によると、胡仁源が旧制第二高等学校に在学していた時期は1905年から1906年まで（明治38～39）の間で、卒業ではなくて中退であった²。中国で一般的に知られている胡仁源の略歴は以下の通りである。

胡仁源、字次珊、号仲毅。浙江省呉江の出身。南洋公学師範班で学び、1902年に清朝の科挙試験を受け「挙人」クラスに合格し、京師大学堂に入学。のち、日本に留学し、仙台の第二高等学校を卒業した。その後イギリスに留学し、造船を専攻。帰国後江南製造局の技術者、北京大学教員、予科及び工科大学学長を経て、1913年11月13日より北京大学の総長代理となり、1914年1月4日の前任者辞職を受けて、2月から北京大学4代目（京師大学堂から通算13代目）総長に就任した。1916年12月6日に北京大学総長を辞任し、その後、国立北京交通大学で教鞭をとり、2ヶ月のみ教育部（中華民国賈徳耀内閣、胡惟徳臨時内閣）総長を務め、唐山交通大学総長を経て浙江大学工学部教授。主要な業績として、『中等応用力学』、『機械工学教科書』、『造船』、『投影幾何学』などの科学技術関係の著書の他に、世界文学の名著のいくつかを中国語に訳した。その中で最も著名なのは『聖女貞徳』（中国語訳名、聖女ジャンヌ *St. Joan*, George Bernard Shaw 原著）と『千歳人』（中国語訳名、メトセラへ還れ、*Back to Methuselah*, George Bernard Shaw 原著）の二種である。更に、カント『純粹理性批判』の中国語初訳も手がけた。

胡仁源の生涯に関しては、その後半生の中国国内における活動がある程度知られているが、その青年期の留学生活をめぐっては未知の部分が多い。それに関連して日本留学・滞在の状況や、第二高等学校在学中の様子も不明のままである。

ところで中国において胡仁源の名は、「元北京大学総長」という他に、次の二つの点で知られている。

一つは、青年胡仁源が文学に転じたばかりの魯迅に向かい「文学などをして何の役に立つのか」と詰問したこと、二つ目は、北京大学の教授陣の中に自分と同じ浙江省出身者を多く集めた、ということである。

一つ目に関して。仙台医専を中退し東京に移った魯迅は、文学によって中国を救うという決心のもと、文学雑誌『新生』を発刊しようと準備していた。魯迅の弟である周作人（1885～1967）の回想によると、当時

1 東北大学大学院文学研究科博士後期課程に1996年から2000年まで在籍。2012年から現職。

2 中国で開催された「2014年日中二国間学術交流セミナー（11月1日～11月2日）——日中留学生研究の現状と課題」において提供された永田英明「在仙官立学校在籍中国人留学生名簿（稿）」による。

日本に滞在していた清国留学生によって作られた雑誌の中に文学を講ずるものは無く、法政や理工学が重視され、文学雑誌を創る意図はなかなか周りの留学生から理解されなかったという。「また、ある客－胡仁源だったらしい－が豫才（魯迅の字：龔注）に言った、あなたは文学をやって何をするつもりか。これは何に役立つのか？（魯迅）答えて云う、文系を勉強する人が理工系の良さも分かる、これこそ良いところです。客は黙然していた。」³

今日の中国の読者から見れば、あの「偉大な魯迅先生」に挑み文学の価値を問いただす青年胡仁源は、勇敢で恰好良い姿に見えるかもしれない。しかし当時の民族の存続さえ危うい状況の中では、胡仁源の発言は特別なものでなく、ごくごく一般的な心情が反映されたものであろう。

ところで一応確認したいのは、「ある客」を胡仁源とする記述には、回想にもとづく不確定さが幾分指摘できる点である。それについて考えるなら、胡氏も魯迅も浙江省出身で、二人とも仙台滞在歴があり、二人とも中退者であるという共通点から推測すれば、この「客」が胡仁源であった可能性は十分にあると思われる。また、時期に関して魯迅研究の成果を踏まえて検討するなら、上記の周作人記録は1907年の夏の頃であろう。つまり、胡仁源がその頃に東京に滞在し、「客」として魯迅兄弟を訪れ、その後渡英し工学を専攻していったことになる。

二つ目について。胡仁源は足かけ4年間北京大学のトップの地位にあり、前身校の京師大学堂（1898年設立）時代を含め、それまでの同大学史上最も実質的な在任期間の長い総長であった。さらに言えば故仁源は、その前に予科大学学長や工科大学学長も務め、前任総長を支えていた。彼は長い自らの任期中に、多くの浙江省出身の知識人を北京大学教員として招致した。大学の中で「浙江郷党」を作ったと評されるほどであった。例えば、以下の人物たちは中国の学界でよく知られた、浙江出身者かつ北京大学人文系教授の代表的な人々である。ただし、胡の前任総長であった何氏と後任総長蔡元培も浙江省出身であるが、ここでは省略する。

- ・馬裕藻（1878～1945年、浙江省寧波出身、1905年官費留学生として早稲田大学に入学）
- ・朱希祖（1879～1944年、浙江省海塩出身、1905年官費留学生として早稲田大学に入学）
- ・沈尹默（1883～1971年、浙江省吳興出身、1905年私費留学生として東京物理学校に入学）
- ・陳大齊（1887～1983年、浙江省海塩出身、1906年官費留学生として第二高等学校に入学）
- ・沈兼士（1887～1947年、浙江省吳興出身、1905年私費留学生として東京物理学校に入学）
- ・錢玄同（1887～1939年、浙江省吳興出身、1906年私費留学生として早稲田大学師範に入学）

以上から分かるように、これらの人々は浙江省出身者のみならず、全て日本留学歴を持っていた。改革者としても知られる胡仁源は、日本留学歴を持った人々を大学に登用することを通して、大学の革新を求めているのであろう。彼は、総長着任時の計画書の中で「学問之士、居本国而久、往往情形隔閡、学問日退」⁴ といい、教師に経費を支給しながら海外研修に派遣し、世界の最新知識に触れさせ、最先端の学問水準から劣ることの無いようにすべきだと主張していた。これと関連して、胡仁源が教員登用の際も、留学経験を持った応募者を重視していたことが推測されている。

1916年12月の胡仁源の辞任後、北京大学は蔡元培の治下いわゆる「全盛期の十年」(1916～1927年まで)に入るが、その基礎を作ったのが他ならぬ胡仁源であった。

3 周作人著・止庵校訂『魯迅の青年時代』(北京十月文芸出版社、2013年)

4 蕭超然『北京大学校史(1898-1949)』増訂本(北京大学出版社、1988年)

北京大学には、胡仁源の退任後も浙江出身者が多く集まった。ちなみに、1920年8月から1926年8月まで北京大学文学部で講師を勤めた彼の魯迅も、浙江省出身かつ日本留学経験者の一人であった。

2. 陳大斉の場合

日本側の資料によると、陳大斉が旧制第二高等学校に在学していた時期は1906年から1909年（明治39～42）であり、私立正則英語学校を卒業した後に二高に入学してきたのである⁵。

陳大斉（1887～1983）、字は百年。浙江省の海塩の出身であり、中国における現代心理学という学問の創始者として認知されている。彼が晩年に書き残した「略歴」に基づきながら主要な履歴を整理すると、次のようになる。⁶

- ・1903年夏、日本に留学し、日本語、数学、英文を習った。
- ・1906年夏、仙台の第二高等学校を受験、合格し入学した。
- ・1909年夏、第二高等学校を卒業して東京帝国大学文科大学哲学門に入学した。心理学を専攻した。
- ・1912年夏、東京帝国大学を卒業、「文学士」という学位を獲得した。同年に帰国し、浙江高等学校の校長を半年間務めた。
- ・1913年、北京法政専門学校予科の教授を務め、心理学及び論理学を教えた。
- ・1914年の夏より北京大学の教授を務め、師範大学や女子師範大学の教授を兼任した。
- ・1929年～1930年にかけて、学科長などを経て北京大学の代理総長を務めた。
- ・その後、暫く政府の教育行政に従事し大統領の顧問を務める。
- ・1949年、台湾に往き、台湾大学教授を務めた。
- ・1954年秋より台湾政治大学総長を務めた。
- ・1959年、政治大学総長を辞した（同大学教授は継続）。
- ・1968年夏に定年退職になった。

以上のように陳大斉は、1912年に日本留学を終えて中国に帰国した後、晩年まで長く人文系の教育や社会活動に従事した。特に、彼が北京大学で近代中国における最初の心理学実験室を創設し（1917年）、自分の講義録に基づいた中国最初の心理学教科書『心理学大綱』を刊行した（1919年）ことは注目される。そのほか陳大斉は、孔子や荀子の思想、「理則学」つまりインドや古代中国の「論理学」をも研究し、著書を出している。

このように、陳大斉の帰国後の業績に関してはある程度把握されているが、彼の「二高」生活や東京帝国大学に留学中の事績に関しては殆ど何も知られていない。ここでは僅かに、陳大斉の日本留學生活を想像させる傍証的な記録を二、三紹介することとする。

まず、生涯の友人であった朱希祖の日記⁷から、仙台時代の陳大斉に関する記述を見ておきたい。当時、朱は東京留學中であった。

- ・陳大斉（百年）の仙台よりの手紙を受け取った。「絶生の説に賛成し、至理だと思えた」と書かれていた。これは、私（朱）の1907年除夜に出した手紙への返信である。（1908年1月7日の条に拠る）
- ・陳百年への手紙を半分書いただけで昼食を摂った。（同年3月23日条）

5 前掲註2に同じ。

6 陳百年「八十二歳自述」(1968年冬成立)

7 『朱希祖日記』(中華書局、2012年)

- ・午後、龔君とともに百年兄を待っていた。(中略) 灯下、百年兄が来て、私のアパートに宿泊した。(同年7月17日条)
- ・午前、陳百年などと雑談した。十一時に、陳仲権及び汪心田とともに陳百年などを招宴して、太和館に行って酒を飲んだ。錢、龔両君も席を共にした。(同年7月18日条)

これらの記述によれば、仙台にいた陳大斉は、手紙を通じて東京にいる友人たちと交流を持ち、東京に出かけることもあったことが分かる。

次に、陳大斉が二高を卒業してから東京帝国大学に進学した時の記録が残されている。基礎史料である「東京帝国大学文科大学 学生名簿」の中の、明治41～44年分を記録した第78丁表に「清 陳大斉 二一・二」の記録がある。この「二一・二」という数字の意味は不明だが、あるいは当時の年齢であろうか。

三番目に、陳大斉の東京帝大哲学門に在学中の主任教授であった井上哲次郎の日記の1909年9月4日条に、次の記事がある。⁸

- ・四日、午前、陳大斉、土井林吉の紹介状を携へて来訪す。

この「土井林吉」は、土井晩翠のことである。彼は二高の教授であり、井上哲次郎と親交を持った人物でもあった。土井が新入生の陳大斉を井上主任教授に紹介したワンシーンであったようだ。高等学校時代の恩師によって大学教授に紹介されることが、当時において一般的な礼儀やしきたりだったのか、それとも土井の特別に親切な行為だったのか、私は関心を持っている。

陳大斉は1912年夏に留学を終えて帰国したが、その後彼の著述で言及された二高関係者の一人に、福来友吉(1869～1952)という人物がいる。陳は講演会や、『新青年』雑誌に発表した「靈学に反す」の一連の発言の中で、福来の研究していた「念写」の実験を紹介しながら批判している。当時、中国においては「靈学」や神秘的な現象をめぐる議論が盛んであったが、陳大斉は科学(主に現代心理学)をもって「迷信」を説破し、愚昧から中国人を啓蒙させようと努力していた中心人物の一人であった。そうした文章が、後に『迷信與心理』(1920年)に収められている。

仙台に集った留学生たちは、その後それぞれ違う人生を歩み始めた。魯迅は医学から文学に転じた。胡仁源は、科挙試験が得意な文人の卵だったが、造船業を専攻し、後ほど人文教育に尽力した。陳大斉は、ほぼ三年近く仙台にいたはずだが、彼は仙台で何を見、感じ、さらに何を体得したのだろうか。——私はこれらのことをすべて知りたい。また、留学生の得たものを知ることによって、逆に当時の二高や仙台の様子も、もっと明らかになるのではないだろうか。

8 村上こずえ・谷本宗生「〈資料〉井上哲次郎『巽軒日記』-明治四二年-」(『東京大学史紀要』32号、2012年)

日中二国間学術交流セミナー「日中留学生研究の現状と課題」について

永田英明

11月1・2日の両日、北京外国語大学日本学研究センター(北京市)および南開大学日本研究院(天津市)を会場に、日中二国間学術交流セミナー「日中留学生研究の現状と課題」が開催された。主催は北京外国語大学北京日本学研究センター(北京外大中国教育部地域と国別基地日本研究中心)であるが、東北大学史料館としてこのセミナーを後援し、あわせて日本側の報告者のメンバーとして史料館教員1、教育研究支援者1、協力研究員2名が参加した。近代中国における日本留学は大学史編纂や大学アーカイブズの整備が進んだこともあり近年調査が進展し、中国側でも、やはり各大学がそれぞれの創立者などの留日経験への再評価を進めている。そうした具体的な留学生研究の成果を日中両国の研究者間で共有し今後の課題を展望する機会としてこのセミナーが企画・実施された。

セミナーでは二日間にわたり、初日は北京外国語大学、二日目は天津の南開大学を会場に、近代中国の日本留学生にかかわる基調講演及び報告が合計9本行われた(表参照)。

戦後の日本における魯迅研究を日本の戦後精神史に位置づけ論じた趙報告、魯迅や陶晶孫といった仙台ゆかりの留学生に触れながら近代中国人の日本留学を「精神史」として論じた巖報告のほか、毛沢東の義父として知られる楊昌済や北京大学総長として知られる陳大斉、蘭州大学の前身甘肅法政専門学校の創立者蔡大愚やその教員たちなど、様々な事例をもとに近代中国知識人の留日経験の実像やその歴史的意味を問う報告がなされ(龔氏の報告については本号の寄稿を参照)、一方日本側からは帝国大学や専門学校などにおける留学生の実態、日本側における「受入」の諸様相について報告が行われた。日中両国研究者双方の視点からの有意義な情報交換によって留学生たちにとっての留日「体験」のイメージを豊かにする一方、今後の課題も浮き彫りになったという点でも、有意義なセミナーであった。



第1日セミナーの終了後

日中二国間学術交流セミナー「日中留学生研究の現状と課題」

基調講演

- ①「戦後日本の魯迅研究——中国の魯迅研究の現状」趙京華(中国社会科学院近代文学研究所研究員)
- ①「帝国大学と中国人留学生—東北帝国大学を中心に—」永田英明(東北大学史料館准教授)
- ①「留日精神史研究に関する文脈上の再思考」巖安生(元北京日本学研究センター所長)
- ②「楊昌済と日本」劉岳兵(南開大学日本研究院教授)

パネルセッション

- ①「魯迅が学んだ仙台医専と仙台」伊藤大介(東北大学史料館協力研究員)
- ①「陳大斉の日本留学」龔穎(中国社会科学院哲学研究所研究員)
- ①「留日法学生蔡大愚の帰国後の教育活動」範亜秋(蘭州大学講師)
- ②「秋田鉦山専門学校の中国人留学生」吉葉恭行(秋田工業高等専門学校教授)
- ②「留日学生、蘭州へ—20世紀初頭中国内陸部高等教育機関における留日経験者の諸動向」
中島英介(蘭州大学講師)

※①は第1日、②は第2日におこなわれた報告

史料館のうごき.....

◇『これからの大学と大学アーカイブズ』が刊行されました

東北大学史料館の創立50周年を記念して、一昨年の9月に記念講演会とシンポジウムを開催したことは、すでに本誌19号でも紹介したとおりです。当日は全国各地から予想以上に多くの方々にご参加いただき、寺崎昌男先生の講演、永田英明・西山伸・森本祥子の各氏によるシンポジウムに対し、活発な質疑が行われました。そうした内容は、これからの大学と大学アーカイブズのあり方について理解を深めていくためにも有益であると考え、記録として残すことになりました。史料館の刊行物として2014年10月に制作し、全国の主要な文書館等に配布していますので、ご覧頂ければ幸いです。



◇日本史実習を受け入れました

ここ数年の恒例となっていますが、本学文学研究科で実施している「日本史実習」の一環として、11月21日と28日の二回にわたる史料館での実習を支援しました。受講生は、佐藤大介准教授（本学災害科学国際研究所）によるアーカイブズについての基礎的な説明の後、実際に史料を扱った整理作業などを行いました。

◇リレー講義「東北大学のひとびと」を実施しています

全学教育のカレントトピックス科目として2011年から始まった「東北大学のひとびと」が、今年度も10月から1月まで実施されています。文学研究科や高度教養教育・学生支援機構の教員と合同で、史料館からは2名の教員（永田英明・曾根原理）が、八木秀次・畑井新喜司・多田等観・黒田チカ・北杜夫・魯迅といった東北大学ゆかりの人々や、その周辺に関する講義等を担当しています。

◇当館所蔵史料を出品しました

前号でもお知らせしたとおり、本館所蔵の①『玉蟲先生像』(安井曾太郎画)を「安井曾太郎の世界」展（ふくやま美術館2014年9月20日～11月16日、佐倉市美術館同年11月22日～12月25日）に、②同「井上秀雄収集拓本資料3点」を「文字がつなぐー古代の日本列島と朝鮮半島ー」展（国立歴史民俗博物館2014年10月15日～12月14日）に出品し、無事会期が終了しました。①は合計約1万2千500名程度の入場者があり、②も愛好家の人々を中心に反響があったと聞いています。

在外同胞救出仙台学生同盟 - 新収資料から -

戦後の混乱期、外地からの引揚者を支援する学生たちの活動が仙台駅前で長く行われていたことをご存じだろうか。

昭和21年春、外地に父兄を残す学生生徒を中心に「在外父兄（のち在外同胞）救出仙台学生同盟」（以下「同盟」）が結成された。仙台にある大学・高等学校・専門学校・女学校などの学生たちが学校の枠を越えて集まり、すでに東京で始まっていた同種の運動を参考に、空襲で焼失しバラック建てで復旧した仙台駅前で活動を始めたのである。当初は駅の出口付近に張られた簡単なテントが引揚者の休息・相談の場所となり、学生たちは交替でここに詰め、満員列車から降りてくる引揚者を迎え湯茶や食事を提供し、重い荷物をもって落ち着き先まで送迎した。舞鶴などの入港地まで学生が出迎えにゆく場合もあったという。医学部や臨時附属医専の学生たちは栄養不足や急病人の応急処置を担当した。こうした学生たちの活動はすぐに広く知られるようになり、県や市の支援のほか一般からの寄附も多く集まった。同盟はその後、東京など各地の「同盟」や学生運動との関係などの問題を抱えつつも独自の活動を続け、昭和25年2月に役割を終えたとして解散した。

このたび、この「同盟」メンバーとして活躍された方々が大切にされてきた関係資料が当館に寄贈された。わら半紙にガリ版で刷られた「同盟週報」、当時実際に使われた腕章、当時の名簿や写真など、混乱の中、様々な不安を抱えながらも奮闘する当時の学生たちの熱気を伝えてくれる。（永田英明）



「同盟」の腕章（上）と
メンバーの写真（下：昭和22年7月）

2015年3月にエレベータ工事が終了する予定です

館内エレベーターの増設工事について、今年の3月には終了を予定しています。その後、準備期間をおいて、2階展示室を再開する予定です。

正確な時期等については、当館ホームページでご確認下さい。

東北大学史料館だより 第22号 2015年3月9日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1 TEL 022-217-5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>